

悪魔の棲む家

2005(平成17)年11月11日鑑賞(東宝試写室)



監督＝アンドリュー・ダグラス／出演＝ライアン・レイノルズ／メリッサ・ジョージ／ジェシー・ジェームズ／ジミー・ベネット／クロエ・グレース・モレッツ／フィリップ・ペイカー・ホール（20世紀フォックス映画配給／2005年アメリカ映画／90分）

……この映画は家に棲む悪魔の声に導かれて（？）、一家惨殺事件をひきおこした実在の物語をテーマとしたもの。立派なお屋敷がなぜ格安なのか？ それにはそれなりのワケがあるはずだが、人間は甘い話に弱いもの……。夫と末娘に現れた異変は次第に拡大。さて、この一家の28日後は……？ それにしても、宅建業法35条の「重要事項」の中に、アスベスト問題とともに「悪魔の存否」を追加しなければ……。



過去の犯罪は説明すべき重要事項……？

この映画に登場する不動産仲介業者（？）は、1人の老婦人。彼女がどんな資格を持ってこのお屋敷の売買契約に関与したのかは知るよしもないが、日本の不動産の売買においては、宅建業法35条において、重要事項を説明すべき義務が規定されている。そして、結構分厚い「重要事項説明書」なるものを、宅地建物取引業主任が口頭で読み上げるのが慣習となっている。

大阪市北区の複合施設「大阪アメニティパーク」(OAP)における土壤汚染問題に、司直のメスが入ったのは、2004年10月。結果的には不起訴処分となったが、この容疑は、販売会社である三菱地所住宅販売大阪支店(同市北区)が、2001年12月下旬、OAP敷地内の土壤と地下水から国の環境基準を超えるヒ素やセレンなどの重金属類を検出した事実を隠してマンションを分譲したという宅建業法違反(重要事項の不告知)の罪。

今年6月30日の、尼崎市にあるクボタによるアスベスト被害の公表によって突

如噴出したのがアスベスト問題。現時点ではアスベストについての説明は、重要事項に含まれていないが、近い将来には、法律改正も予想されるところ……？

しかして、この映画のように、立派な建物だがその建物内で凄惨な「一家殺人事件」があり、この家は「悪魔の棲む家」であることは、不動産取引において説明すべき重要事項では……？

これは実話にもとづいたお話……

映画の冒頭、「これは実話にもとづいたお話である」という字幕が流れてくる。その実話とは、1974年11月13日に現実に発生した、就寝中の両親と4人の兄弟たちを、長男のロナルドがライフルで順番に射殺したという事件。凄惨な事件だが、興味深いのはその動機。ロナルドは家から聞こえてくる「捕まえろ、殺せ」という声に導かれて、この行動に及んだと自白したらしい。しかし、それを聞いて誰しも「そんなバカな！」と思うのは当然。

したがって、このすばらしい大邸宅を格安で買えると知ったジョージ（ライアン・レイノルズ）とその妻キャシー（メリッサ・ジョージ）が、過去に殺人事件があったと聞いても、「家が人を殺すわけではない」「人が人を殺すのだ」と割り切って購入することに踏み切ったのは、ある意味当然。さて、その選択はマルそれともバツ……？

異変はまず夫に

ジョージとキャシー夫妻には、ピリー（ジェシー・ジェームズ）、マイケル（ジミー・ベネット）、チェルシー（クロエ・グレース・モレッツ）という3人の子供がいる。もっとも、話を聞いていると、この子供たちはキャシーの死に別れた前の夫との間に生まれた子供のように……？

なぜそんな設定にしたのかはよくわからないが、あえて推測すれば、「家に棲む悪魔」のたたり（呪い）がキャシーではなくジョージに現れるという設定のためには、ジョージと子供たちとの間に血縁関係がない方がベターと考えたのかも……？ そんなわけで、夢をいっぱいにくらませて新居に引っ越してきた一家5人の中で、まず最初に異変が現れたのは夫のジョージ。

続いて娘のチェルシーに

第2の「異変」は、末娘のチェルシーに。これは『ダーク・ウォーター』（05年）と全く同じ設定で、チェルシーが実在しないお友達のジョディと「お話」をしはじめたこと。ジョディとはクローゼットの中に隠れていたところをロナルドに見えられ射殺された末娘の名前で、チェルシーには血にまみれたこのジョディの姿が見え、お話できるというわけだ。最初は母親のキャシーもこれを軽く受け流していたものの、本気らしいとわかり、しかもジョディの仕業と考えざるをえない事件が次々におこると、次第にキャシーもパニック状態に……。

神父も頼りにならないもの……？

やさしかった夫が次第にヘンな症状を見せはじめたため、キャシーは自分がお屋敷を買おうと強引に説得したことを反省し、お屋敷を出ていこうとまで提案した。しかしその時点では、もはやジョージはかなりヘン……。

そこでキャシーは、家族の人間的な悩みと屋敷そのものの悩みを聞いてもらうべくキャラウェイ神父（フィリップ・ベイカー・ホール）を訪ねたが、そこで神父から聞かされたのは、1年前のこの屋敷でおこった凄惨な事件。キャシーは神父に頼んで、家に棲んでいる悪魔を追い払ってもらおうとし、神父も道具一式を持参してその儀式をやろうとしたが……？

「善」と「悪」どちらが強いのか、と聞かれると、ふつうは悪の方が強いもの……？ しかしてキャラウェイ神父の力量では、お屋敷に棲んでいる悪魔を追放することはできず、逆に返り討ちにあうことに……？

怖い映画は好きそれとも嫌い……？

この映画はタイトルからわかるとおり、典型的かつ古典的なわかりやすい（？）ホラー映画。パンフレットには、「ホラー映画ブームの変遷」と題する面白い分析がある。それによれば、『エクソシスト』（73年）がそれまで特殊なジャンルとして扱われていたホラー映画を一気にヒット・ジャンルへと押し上げ、空前のホラー映画ブームを生み出したとのこと。そしてそれ以降、たくさんのホラー

映画がつくれ、「ホラー映画に市民権を与えた」とのことだ。

私は基本的に怖い映画は嫌いだから、ホラー映画は苦手。しかしなぜか、怖い映画が大好きというヘンな奴も多い。もっとも、『シックス・センス』（99年）以降、『アンブレイカブル』（00年）、『ヴェレッジ』（04年）などナゾ解きのホラー映画もたくさん登場しており、私はこの手のホラー映画はあまり苦手ではない。

さてあなたは、この『悪魔の棲む家』のような典型的かつ古典的なホラー映画は、好きそれとも嫌い……？

なぜヘンなベビーシッターが

新居に引っ越してからヘンなことばかりが起こり、気分が減入っているジョージとキャシーは、「たまには気分転換を！」とばかり、恋人時代に戻るべく夫婦2人でイタリアンレストランへ。そのため、一時ベビーシッターを頼んだのだが、そこでやって来たベビーシッターがリサ（レイチェル・ニコルズ）。「僕はもう大人なんだから、ベビーシッターなんかいららない」とダダをこねていたビリーだったが、ヘソ出しルックでえらく挑発的な（？）リサの姿にビックリするとともに即座に前言を撤回……。まだまだ子供と置いていたら、やっぱり男の子……？

このリサはビリーを誘惑（？）してみたり、このお屋敷のことに詳しいため1年前の殺人事件の解説をしてみたりと、いらぬおせっかいは焼いていたところ、クローゼットの中でロナルドに殺された末娘のジョディの怒りを買って、大事件が発生することに……。ジョージとキャシー夫婦を中心とした一家5人だけの登場人物では物語の幅が狭くなるため、登場人物を少し広げたわけだが、こんなベビーシッターはちょっとヘンでは……？

なぜ28日後……

1年前にこのお屋敷で現実には発生した一家惨殺事件は、引っ越してから28日後だった。そして、今日がそれと同じ、一家5人がこのお屋敷に引っ越してきてから28日後だが、ジョージの症状（？）はかなりひどくなっている。彼は今や地下室内で1人で寝泊まりしているため、事実上「家庭内別居」状態……。そして今日、キャシーは図書館で、あの1年前に起こった事件の全貌と、このお屋敷の地

下室に秘められた不気味な物語を知ることによって……。面白いのは、それがなぜ28日後なのかということ。

そこで思い出したのが、そのものズバリのタイトルの『28日後… (28DAYS LATER)』(02年)という映画(『シネマルーム3』236頁参照)。これはロンドンで発生したウイルスによる感染症が猛威を奮い、人類絶滅の危機に陥るという怖い映画だが、なぜ「28日後」ということに人間はこだわるのだろうか……？

なぜ午前3時15分

この映画で家に棲む「悪魔」が動き出すのは午前3時15分。今年9月13日に観た、『0:34 レイジ34フン』(05年)というロンドンの地下鉄で起こる事件を描いたホラー映画のタイトルは、地下鉄の最終の時刻だったから、すぐになるほど納得できたもの。しかし、夜中の何時から悪魔が活動し始めるのかについては定説はない。ちなみに、日本の怪談モノでは、よく「丑三つ時」という言葉が使われるが、これは午前2時から2時半を指すもの。それがこの映画では午前3時15分なのだが、この時刻は、悪魔が活動を開始する時刻としては少し遅すぎるのでは……？

悪魔から逃れる解決策は？

この映画は、そのタイトルどおり、「悪魔の棲む家」に入居した5人家族のうち、夫のジョージと末娘のチェルシーに現れる異変、とりわけ「加害者」となるべき運命にあるジョージのそれに焦点を当てて、少しずつ観客の恐怖を煽っていくもの。しかし、ベテラン弁護士の私の判断を仰ぐまでもなく、このジョージ家が遭遇している問題の解決策はきわめて簡単。それは、このヤバイ家を離れること。つまり、多少の損は覚悟のうえで、早くこのお屋敷を転売して出ていくことに決まっている。現にキャラウェイ神父が勧めたのもそれ。ところが、それがなかなか決断できないのが人間の弱いところ……。

さてこの映画は、5人の家族を悲劇の極致にまで至らしめるのだろうか、それともどこかで何らかの救いの道が開かれるのだろうか？ それは、映画を観てのお楽しみに……？

2005(平成17)年11月12日記